

Title	東京歯科大学千葉病院口臭外来受診患者の最近3年間の臨床統計
Author(s)	富田, 幸代; 亀山, 敦史; 渡邊, 直子; 牧野, 麻子; 高山, 沙織; 細井, 隆太郎; 勢島, 典; 中西, 万里子; 色川, 大輔; 石井, 善仁; 田中, 公文; 杉山, 利子; 齋藤, 淳; 角田, 正健
Journal	歯科学報, 112(2): 165-165
URL	http://hdl.handle.net/10130/2746
Right	

No.17: 東京歯科大学千葉病院歯科麻酔科外来症例の臨床統計 (2011年1月~12月)

若杉由美子¹⁾, 遠藤真唯¹⁾, 岡田玲奈¹⁾, 征矢 学¹⁾, 神戸宏明¹⁾, 黒田英孝¹⁾, 武田慶子¹⁾,
後藤隆志¹⁾, 小鹿恭太郎²⁾, 塩崎恵子¹⁾, 松浦信幸¹⁾, 松木由起子¹⁾, 間宮秀樹¹⁾, 櫻井 学¹⁾,
一戸達也¹⁾ (東歯大・歯麻)¹⁾ (東歯大・市病・麻酔)²⁾

目的: 2011年1~12月に千葉病院歯科麻酔科が外来及び院内出張にて担当した症例について集計し, 検討したので報告する。

方法: 患者数, 症例数, 男女比, 年齢分布, 患者分類, 処置内容および管理方法についてレトロスペクティブに集計した。

成績および考察: 総患者数は2,384名, 総症例数7,362症例で, 男性1,011名, 女性1,373名, 0~19歳288名, 20~39歳814名, 40~59歳580名, 60~79歳594名, 80歳以上105名であった。患者分類はペインクリニック284名2,063例, 有病者573名1,543例, 障害者419名1,443例, 歯科恐怖症患者(異常絞扼反射, 過換気症候群なども含む)430名1,332例, 口腔外科小手術患者385名449例, インプラント患者154名250例, 救急患者38名38例であった。有病者の内訳は循環器疾患964例, 呼吸器疾患108例, 代謝内分泌疾患66例, 薬物アレルギー37例, その他116例であった。歯科処置中の管理法では精神鎮静法が2,807例と最も多く, このうち2,785例が静脈内鎮静法

(IVS)であった。モニター監視は153例, 歯科麻酔科医スタンバイおよび体動抑制は220例であった。歯科麻酔科外来での全身麻酔は160例で, 日帰り症例136例, 入院症例24例であった。また, 他科外来への院内出張症例は689例であり, そのうち出張 IVS は485例であった。2010年と比較すると総患者数は126名増加し, 総症例数は571例増加した。また, 外来全身麻酔症例数も29例増加した。総患者数および外来全身麻酔症例数増加の背景として, 今年度より歯科麻酔科外来のチェアー数が2台から6台に, 全身麻酔器が1台から2台にそれぞれ増設したことが考えられる。しかし現在のところ新たに増設した4台のチェアーでは, 使用するタービンの数が不足しているため保存や補綴処置が行えず, 口腔外科処置のみを行なっている。今後, 新たに増設した4台のチェアーでの処置を口腔外科だけでなく他科の診療も行えるようにすることで, 歯科麻酔科外来での治療がさらに円滑に進むのではないかと考えられる。

No.18: 東京歯科大学千葉病院口臭外来受診患者の最近3年間の臨床統計

富田幸代¹⁾, 亀山敦史²⁾, 渡邊直子¹⁾, 牧野麻子¹⁾, 高山沙織¹⁾, 細井隆太郎¹⁾, 勢島 典¹⁾,
中西万里子¹⁾, 色川大輔¹⁾, 石井善仁¹⁾, 田中公文³⁾, 杉山利子²⁾, 齋藤 淳¹⁾, 角田正健²⁾
(東歯大・歯周)¹⁾ (東歯大・千病・総合診)²⁾ (東京都)³⁾

目的: 東京歯科大学千葉病院口臭外来は, 2001年に歯科専門外来の1つとして開設され, 以来, 口臭を訴える患者の診断と治療に当たっている。2012年3月までの約11年間で, 延べ2,311名が受診した。今回, 最近3年間における来院患者動向を分析したので報告する。

方法: 口臭外来ではまず受診者に口臭に関する質問票への回答を依頼し, その後官能検査と口臭分析装置による客観的な検査を行っている。口臭分析装置として, 2003年からOral Chroma (アビメディカル社)を使用している。

2009年1月から2011年12月までの3年間に口臭外来を受診した患者を調査対象とした。口臭質問票の各項目における回答を集計し, 外来受診者の傾向を分析するとともに, これらの回答結果と実際の口臭診断結果を照らし合わせ, その関連性について検討した。

成績および考察: 最近3年間における口臭外来患者の延べ人数は429人であった。このうち, 口臭のデータ使用に同意が得られたのは363名であり, その内訳は男性123名, 女性240名であった。年齢別では40歳代が81名(22.3%)と最も多く, 次いで60歳代(73名 20.1%)と50歳代(71名 19.6%)が多かっ

た。また, 10歳未満の受診者は4名であった。口臭を意識するようになった契機については人からの指摘が最も多く, 中でもその大半が配偶者からの指摘であった。

口臭の自覚がある者は298名(82.2%)であり, 自覚していない者が9名(2.5%), わからないと答えた者が55名(15.2%), 無回答1名であった。口臭の自覚がある者のうち, 105名(35.2%)が10年以上前から何らかの自覚を持っていたと回答している一方で, 89名(29.9%)は過去3年の間に自覚するようになったと回答した。したがって, 長期にわたり口臭に関する悩みを抱え続けた者, 近年の「臭い」への意識の高まりにより自覚するようになった者のいずれも受診していることが明らかとなった。また, 口臭を自覚しているにもかかわらず, 約半数(140名 46.9%)の者は口臭検査では「口臭なし」と診断されており, 口臭の自覚と実際の臭気レベルは必ずしも一致しないことが明らかとなった。

自分の口臭が社会生活や家庭生活に支障をきたすと回答した者はそれぞれ195名(53.7%), 113名(31.3%)と比較的多く, 口臭への悩みが受診者のQOLを低下させている可能性がうかがえた。